

日本の神話

国生み・神生みの物語

小島瓊禮



日本の神話

国生み・神生みの物語 小島瓔禮



世界の神話 10

筑摩書房

164/日本の神話

世界の神話 10

296pp/18.8cm/四六判

著者略歴

奈川県に生まれる。国学院大学文学
司大学院修了。琉球大学教授。国文
学専攻。著書に『琉歌往来』（風信
本霊異記）（集英社、共著）、『武相昔
崎美術社）、校注に『風土記』（角川
神道大系一神社篇、沖縄）（神道大
）などがある。

1983年1月30日 第1刷発行

著 者 こ じま よし ゆき
小 島 環 禮

発 行 者 ぬの かわ かくざ えもん
布 川 角左衛門

発 行 所 ちく ま しよ ほう
株式 筑 摩 書 房
会社

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7 6 5 1 (営業)

(294) 6 7 1 1 (編集)

郵便番号101-91 振替東京6-4123

多田印刷・積信堂

©1983 Y. Kojima, Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

日本の神話・もくじ



☆はじめに——『古事記』『日本書紀』
の神々の物語

3

I 世界の起源

世界のできはじめ

21

天地創造の物語の神々

25

神の結婚から国生みへ

28

神生みと母なる神の死

35

死者の世界

43

みそぎで現れた神

50

II 太陽の神と荒ぶる神

荒ぶる神の悲しみ

59

玉と剣から生まれた神々

65

隠れた太陽

69

八咫のヲロチ

76



Ⅲ 出雲の大地の主

荒ぶる神の結婚

85

ベテン師八十神とオホアナムチの命

89

大地の主への試練

96

ヤチホコの神の歌物語

101

海から来た小さい神

116

Ⅳ 高天の原と葦原の中つ国との交渉

帰らない天上の使者

125

大地の主の国譲り

135

Ⅴ 大王への系譜

天降る大王の祖神

145

山の神の女との結婚

153



なくした釣り針
海から来た母

168 158

Ⅶ アメノヒホコの命の神話

新羅の太陽の御子

177

ヒホコの子孫のイトデ

185

アメノヒホコの命の国求め

187

Ⅶ 琉球の神話

その1 琉球神道記

195

その2 中山世鑑

200

その3 聞得大君御殿并御城御

207

規式之御次第

207

その4 宮古島紀事仕次

213

神話を学ぶ人のために

219

装幀・さしえ 田沢

茂

日本の神話



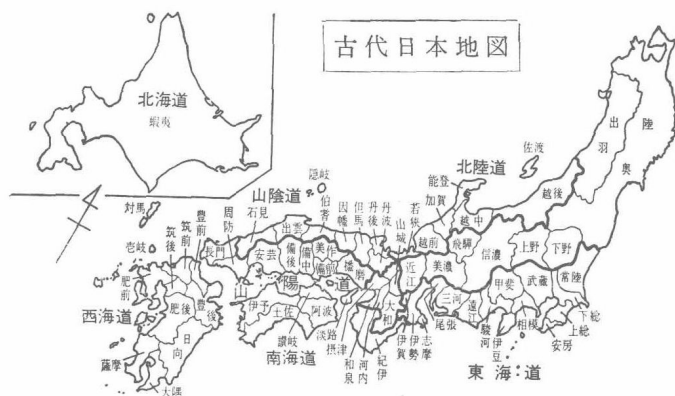
はじめに——『古事記』『日本書紀』の神々の物語

日本の神話の記録

日本には、今から千二百五十年余り前、八世紀の初めに、天皇の命令をうけて書かれた二つの皇室の歴史書があります。『古事記』（七一二年に成立）と『日本書紀』（七二〇年に成立）です。どちらも、皇室を中心に、初代の神武天皇以下、歴代の天皇を軸にした歴史を記しています。が、共通して、その最初の部分は、天地創造から始まる神々の物語です。そこでは、世界の始まり、神の出現、国生み、神生み、その他、さまざまな、物事の始まりが語られています。

『日本書紀』では、この神武天皇に至るまでの神々の物語の部分を「神代」と呼び、全三十巻のうち、最初の二巻に収めています。『古事記』も、上、中、下、三巻のうち、上巻が、この神の物語にあてられています。

どうも、古代の人々は、神武天皇以後の歴代の天皇の時代を人間の時代とするのにたいして、神々の物語の時代を、それとは異なった、神々の時代と考えていたようです。



今日、私たちが、「日本の神話」と呼んでいるのは、こうした、『古事記』や『日本書紀』など、古代の記録に見えている神々の物語、つまり、「神代」の物語のことなのです。

神話を伝える材料——「帝紀」と「旧辞」

この時代、皇室を中心にした歴史を伝える材料に、「帝紀」と「旧辞」とがありました。「帝紀」とは、歴代の天皇を中心にした皇室の系譜であり、「旧辞」とは、その中の人物、たとえば、天皇などにまつわる物語です。

「神代」の部分も、おそらく、同じような材料によって伝えられていたものとおもわれます。神々の系譜がくわしく説かれていたのは、「帝紀」によるものでしょう。神々が主役を演じる物語は、「旧辞」に相当します。この「帝紀」と「旧辞」という伝え方は、人々にとって、とても便利な記憶法であったようです。系譜で



太安万侶の墓のある畑と墓誌



は、神や人の名を機械的に覚えこみます。そして、一つ一つ、独立した物語として覚えておいたさまざまなできごとを、系譜にしたがってその人物のところにはめこめば、歴史の体系ができていくのです。

このように、皇室を中心として、それぞれの氏族の人々の中に、長いあいだ受け継がれてきた「帝紀」や「旧辞」の伝えも、七世紀ごろには、文字で書かれ、記録されるようになりました。『古事記』や『日本書紀』も、そうした流れをうけて、編集されました。

『古事記』の成り立ち

『古事記』は、この「帝紀」と「旧辞」をもとにして、まとめあげられました。序文には、稗田阿礼ひえだのあれという人が「誦習」したものを、太安万侶おののやすまろが筆記したと書いてあります。「誦習」の意味は、はつきりしませんが、記録された「帝紀」や「旧辞」などの材料を、稗田阿礼が、自分の知っている言い伝えの知識で整理して、よみあげたとい

うことのようにです。

稗田ひえだというのは、『古事記』にも出てくる猿女君さるめのみぎみの子孫の家柄いへがらでした。おそらく、豊富な、「帝紀」や「旧辞」に関する知識が伝わっていたのでしょう。猿女君について、『古事記』が、『日本書紀』よりくわしいのも、稗田阿礼ひえだのあれが、かかわっていたからだとおもわれます。

古くから、稗田阿礼は、女性であるといわれてきました。それは、稗田家が、女性で家を継ぐ、めずらしい家柄だったからです。しかし、『古事記』の序文には、阿礼は、舍人とねりという役職であったと書いてあります。この当時、舍人といえば男の役職ですから、阿礼も、男性であつたろうともいいます。

大化の改新（六四五年）以来、古い社会の仕組みは改められ、中国風の男性中心の制度に変わっていました。稗田家も、男性が世の中の表面に立つようになっていたかもしれません。『古事記』を見るかぎり、古くからの言い伝えをたいせつにする家柄であることには、変わりありませんでした。

『日本書紀』の「神代」の

『古事記』が、古い言い伝えをたいせつにし、「帝紀」や「旧辞」を整理して、一つのまとまった皇室の歴史を描えがこうとしているのにひきかえて、『日本書紀』は、中国の歴史の学問の影響えいきやうを

うけて、できるだけ、学問的に、皇室の歴史を記そうとしています。『日本書紀』の編集には、大勢の学者がかかわっていました。

ことに、「神代」の神々の物語の部分では、全体を十一段に区切り、その段落ごとに、異った伝えが、一つ一つ並べてあります。おそらく、当時、皇室などに伝わっていた「帝紀」や「旧辞」の記録を集め、もとの材料のまま配列したものでしょう。「神代」の伝えは、どれが正しいとはいえない、言い伝えなのだという考えがあったのかもしれませんが。中には、『古事記』の記事に、とてもよく似ているものもあります。

『日本書紀』のこうした神々の物語の記事は、古代の神話の姿を知ろうとする私たちには、たいへん参考になります。それは、日本の古代の神話が、人により、氏族により、いろいろな形をとりながら、全体の体系では、一つの大きなまとまりを持っていたことがわかるからです。日本の神話も、「帝紀」や「旧辞」として文字で記録されるようになる前には、やはり、記憶によって、口伝で伝えられていた時代があったはずですから。そうした生きている日本の神話のようですが、これらの変化した伝えから、うかがえるのです。

地方や氏族の神話

ちょうど、『古事記』や『日本書紀』ができたのとあい前後して、七一三年には、日本各地の

国々に、地誌をつくるようにという朝廷からの命令が出ています。今も伝わっている『常陸国風土記』（今の茨城県）や『播磨国風土記』（今の兵庫県）は、その直後にできたものです。

また、ややくだつて、七三〇年ごろにも、各地の地誌がつくられています。七三三年にできた『出雲国風土記』（今の島根県）や、ほぼ同じころの成立とおもわれる『豊後国風土記』（今の大分県）や、『肥前国風土記』（今の佐賀県、長崎県）などが、それです。

こうした、一連の地誌『風土記』の中にも、それぞれの地方に伝わっていた神々の物語が、いくつも見えています。『古事記』や『日本書紀』の神話と共通しながら、地方的な個性を備えているものも、すくなくありません。

たとえば、『常陸国風土記』には、今の鹿島神宮に、国譲り神話の別の伝えがあったことが見えています。また『播磨国風土記』には、国づくりをするオホアナムヂの命の活躍が伝えられています。『出雲国風土記』にも、オホアナムヂの命などの地方的な伝えが記されています。

このほか、やや時代がくだつてからまとめられたものですが、皇室の祭りの仕事をあずかっていた斎部氏が、古くからの伝えを書きとめた『古語拾遺』（八〇七年）や、摂津国の住吉大社（今の大阪府）をめぐる伝えを集めた『住吉大社神代記』（七八九年）などもあり、特定の氏族や神社の伝える神話がどのようなものであったか、うかがうことができます。

また、八一五年に完成した『新撰姓氏録』は、畿内に住む氏族の由緒を書き記した本ですが、

その中にも、神々を先祖とする氏族の伝えが、いろいろ見えています。

神話というものは、伝えられているうちに、だんだんに変化するものですが、このような、八世紀初期から九世紀初期に至る、約百年のあいだの記録をたどった範囲では、それぞれがいを持ちながらも、ほぼ同心円を描いて展開していたといえます。

日本の神話の特色

日本の神話の大きな特色は、一つの体系を持っているということです。もちろん、それは、体系的に神話を記している『古事記』や『日本書紀』が伝わっていたからです。ほかの記録に見えている断片的な神話だけから、これほど体系的な神話を復元することは、不可能に近いことです。

あるいは、皇室の神話が、ある時期に、だれかによって体系的に整理され、それが日本神話の基準にされたからだという人もあるかもしれませんが。この世にある物語で、いつか、だれかが、つくらなかったものなんて、あろうはずがありません。そのつくり方が問題なのです。

神話には、語られる物語を支えている論理があります。神話の論理といったらよいでしょう。物語は、架空のできごとを語りますが、真実らしくなければなりません。神話も、空想的な物語ですが、神々の物語として、真実らしさがなければなりません。その神話としての真実性、

それが神話の論理なのです。

『古事記』や『日本書紀』に見える日本の神話の体系は、神話らしい筋道がみごとにとおって
いて、そういう意味で、神話の論理に、とてもよくかなっていると、私は考えています。その
ことは、この本の終わりに書き添えた「神話を学ぶ人のために」の中で触れておきました。

古代日本人の異郷観

この神話の論理を実際に支えているのは、神話を伝えている人びとのものの考え方です。そ
れは、信仰とか、世界観とか呼ばれる、ものの見方として現れています。

日本の神話では、神々の世界は、天上にあるとされています。高天の原です。私たち人間の
世界とは異なった世界、つまり異郷をどのように考えるかも、神話のたいせつな特色になります。
地上の人間の世界は、芦原の中つ国といいました。中つ国とは、上、中、下の中ということ
で、もう一つ、下の国を考えていました。それが根の国のようです。

根の国は、神話を見ている、すこしはつきりしないところがあります。しかし、どうも、
地下の方向にある、はるかな遠い国という意味のようです。地上に住む私たちが、立体的に異
郷を考えれば、天上か地下しかありません。

琉球諸島（鹿児島県の奄美群島と沖縄県）で、ニライというのも、根の国と同じ考え方の異郷